

---

# 恋愛メイク

木下芽衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛メイク

### 【Nコード】

N8992E

### 【作者名】

木下芽衣

### 【あらすじ】

エリート校に通う見た目地味だけとおしゃれしてみたいと思ってる高1の女の子と見た目は不良だけど夢にむかっている純粋な男の子と仲間達の笑いあり？涙はあり…（ないかも）感動ありの青春物語風にしてみました

出会いはゴキブリ(汗)∴？(前書き)

読んで頂けたらと思います！  
頑張ります！v(、´v)

出会いはゴキブリ（汗）…？

私は眠り姫

いつか訪れる王子様と恋をするの…

と夢見ていたのは遠い昔…

「委員長長〜！これやって」

指定どつりの長さのスカート

ストレートな黒髪に

化粧気のない顔、眼鏡小さい時から遊ぶ事がなく勉強ばかりしてきたから、学年2位

すっかり委員長というあだ名になってしまった、この私。

椎名 紗織 高校1年生。

ここの高校は中学からの持ち上がりエリート校らしく、金持ちが行く高校（悪くいえば金さえいればどんな馬鹿でも入れる）。でも一般入試の外部受験はトップクラスレベルの高校だ。

私は、先生や親に進められこの高校に受験し受かった。

親はあのエリート校に受かったと言って自慢しているが…  
周りは馬鹿だらけ！！これがエリート校だとは思えない！  
絶対 金で入った奴ばかりだ！！！！

「ちよつとは自分でしたら？」

「だってわかんないんだもん！」

「確率も分からなくてどうすんの！！！」

ホントこの学校はおかしいよ…

先生

「委員長、ちよいいいかあ？」

「はい！」

後は自分でやってっ」

「しよんな」

先生

「はいこれ！」

目の前にある大量のプリント用紙。  
机に置いたときにドンツと効果音がなりそうだ。

「…これを」

「これを義務室にもっておいてくれ！」

「パシリですか…」

「頼まれてくれ  
いまから会議があるんだ！」

「…分かりました」

断れなかった…

にしても 重いなコレ5キロあるんじゃないの?!

カサッ

ん? なんか音する

プリント持つてるから前見えない

バサッ

飛んでいる

茶色い光沢のある楕円形は…

ゴキブリ…?!

「つぎやややー!」

ヴァサバサア

「大丈夫か?!」

「ムリ…」

「ほら手貸してやるから」

「ありがとお…」

見上げると

夕日と同じくらい明るい髪、ワックスでつんつんにたたせてある耳にピアス

見るからに不良の姿が目の前にあった。なんかさっきから見られてる気がする…

！

怒らしたのか？！

「すすすいません！」

「なにが？」

「見られてるきがしたんで…  
怒らしてしまいましたか？！」

「あ 違う違う」

よかったあ

「…ちよつといい？」

「はい？」

「おれの作品になってみない？」



「は？」

自分に春がくるなんてこのときは思いもしなかった

変身させちゃうー！（前書き）

すみません！

前の文章で黒髪だけでしたけど正確には  
長い黒髪です。

ごめんなさい！！

変身させちゃうっ！

「オレの作品になってみない？」

「は？」

何言い出すんだこの人…  
私を作品って…？

「その間はOKで事？」

パチンッ

指をならすと一人の男の人が現れた！？

「彼女をSRに」

「かしこまりました」

男の人に抱き抱えられた

「ちょ！

まだ何も」

何も言っていないのに

車の中

さつき無理矢理押し込められたのだ

…にしても高級車の中はホントに車なのかと思うほど豪華で広い！  
ここで生活出来そうだ

「おい！」

「へ？」

「着いたぞ」

「すみませんっ」

「こっちな」

彼に着いていくと…

可愛い部屋にたどり着いた

「かわぁいい！」

「それはよかった」

「なんでこんな所に私を？  
と言うより名前は？  
作品って？」

「待った！」

そんなに質問攻めだとわかんなくなるから！」

「俺の名前は優雅  
優雅って呼んで

君は椎名紗織ちゃんでしょ？」

「何で？名前……」

「いつも2位の所に書いてあるから  
それと紗織て名前  
似合ってる」

名前で褒められたの初めて……  
なんか照れる

「ありがと……  
じゃあなくて！」

「分かってるって  
作品って何かでしょ？」

私は頷いた

「それは…  
変身させる事！」

「へ？」

「紗織ちゃんて化粧してないしおしゃれ気全然ないじゃん  
だからおしゃれモード全開のかわいい女の子に変身させたい」

おしゃれに興味をもっていた私  
ずっと思っていたなと思っていても自分には似合わないと思って遠ざけてきた

この人についていけば変わるかもしれない…

「やります」

「んじゃあ

交渉成立！」

「よろしくね紗織ちゃん」

「よろしく優雅君」

私達のふしぎな関係の始まり始まり〜

## 変身させちゃうっっ (前書き)

遅くなっ  
てすみません宿題に追われていました



変身させちゃうっ

優雅

「説明しとくね」

？

優雅

「俺を代表とした4人組のグループで活動してるんだ」

ガチャ

後ろのドアが開いた

「ゆうー」

いきなり呼ばないでくれる？

せっかくデートしてたんだから」

紗織

「あっ！

小西さん！（1話で数学してた子）」

「あつ！

委員長」（^^）」

「あつ

ホントだ

委員長だあ」

「東君もつ（委員で同じ）」

優雅

「紹介しよう

女のほうが

小西麻由

通称麻由

ファッション担当で

そのイケメン君は

東虎乃助

通称トラ

ネイル担当」

んで

「もう一つ言つとくとトラはフランスとのハーフで  
甘い顔立ちで女子に  
人気だけど

小さい時

姉ちゃん達に襲われてから女子恐怖性になったんだって

麻由はそれを知ってるけどトラのこと大好きでいっつも追いかけてる  
今さっき言ってたデートやかも

トラを追いかけてたんだろうね」

「これで分かった？

(ゼイゼイ)」

紗織

「長いご説明ありがとう 優雅君」

麻由

「てか

麻由のことストーカーみたいに言わないでくれるう？  
ねートラ君？」

トラ

「うえ？(汗)

うん…

頼むから

腕放して…」

麻由

「やーだん

照れてる

かわいい」

優雅

「それは

完璧に嫌がつてるぞ」

なんか濃ゆいな

あれが

いまどきの女の子？

てか

東君

私と話す時

普通なのになぁー

気のせいかな？

優雅

「トラ

慧は？」

トラ

「ああ

図書館に居たよ

呼んだから

もうすぐ来ると思う

それと

優雅 助けてえ……」

優雅

「まだ

へばり付いてたのか

麻由！

いい加減放してやれ！」

麻由

「はぁーい」

紗織

「小西さん

『慧』って？

また

同じクラスの人？」

麻由

「違うよ」

慧は一つ下の子

見た目は大人だけど

クソガキなの

てか

小西さんって堅いから麻由で呼んでえ

あつ まぁーちゃんでもいいよ！」

紗織

「まぁー…

麻由  
「

麻由  
「よろしくね！」

あつ

笑顔かわいい

エクボが出来てて

トラ

「オレも

トラでいいよ！」

ガチャ！

「  
…」

麻由

「この子が

慧

湖南慧で

ヘアー担当だよ！

けーい！

遅れた時は

ごめんなさいでしょう？」

慧

「うるさい

厚化粧のおばさん

なんで

あんたの言う事聞かないといけないんだ」

麻由

「キイイ！！（怒）殺っていい？！」

今

鬼が見えました

優雅

「ダメだろ？

慧

麻由に謝って？」

慧

「…すみません…」

優雅

「よろしい

麻由だって一応

年上なんだし

言う事聞かないと」

麻由

「何その扱い?!一応って」

優雅

「それでも

良くしたつもりだけど?」

ギアースカ×2

スゴい…

優雅君の事一瞬で

言う事聞いた

紗織

「トラ君」



トラ

「なに？」

紗織

「優雅君と慧君って  
仲良いの？」

トラ

「んー

仲良いといえば

そうなるし

言わなければ

それでも

ないかもしれないし…」

どういうこと？

麻由

「あー！

さーちゃん

トラちゃん取らないでえ！」

紗織

「取らないけど（汗）…さーちゃんって？」

麻由

「あだ名あ！」

紗織ちゃんだと

つまないから

さーちゃんにした

ダメだった？」

紗織

「ダメじゃないけど…」

麻由

「どうしたの？」

紗織

「委員長以外で呼ばれたの久しぶりだなあと思って」

麻由

「そんなことお（\*^ ^\*）

いくらでも呼んだげる」

優雅

「はい

そこまで」

優雅

「話盛り上がってるとこ悪いけど  
本題入るね」

あ そうだった

優雅

「俺 慧 トラ 麻由でスペシャル4略してS4というグループを  
組んでるんだ  
メイク・ヘア・ネイル・ファッションと  
担当に分かれて  
一人の女の子を変えていく活動だ」

麻由

「さーちゃんを  
可愛くしてあげる」

トラ

「大丈夫だって」

慧

「…」

優雅

「というこで

紗織“可愛くおしゃれモード全開の女の子変身”開始！」

麻由・トラ

「ながっ」

私は どういう風に  
変わるのだろう？

楽しみだ

変身させちゃうっっ(後書き)

やっと

次回から紗織《変身》です

どんな風になるのか…まだ 自分でもわかりません(汗)

…頑張ります！

茹でタコ二人組 3 (前書き)

やっと

変身します！

## 茹でタコ二人組っ3

麻由

「まずはあ

私からね 服なんだけとお

どんな感じに

したい？」

紗織

「私は何でも…」

トラ

「お姉様風が紗織ににあってるんじゃないかな？  
しっかりしてるし」

麻由

「そうだよねえ（上目遣い）

トラ君は

お姉様風ファッション好き？」

トラにすり寄り

腕をからませてる（汗）積極的だなあ  
恐ろしいぐらいに…

トラ

「えっ…」

あ うん…

あのお麻由さん」

麻由

「何い？

愛の告白う？」

トラ

「放して…」

麻由

「いゝや（^^）

一生放さない！！

どこだって

付いて来ちゃう（笑）

お家にだって

トイレやお風呂…

キヤー！！／／／／

麻由困っちゃう！」

麻由さん…

それ 間違えなく犯罪デスヨ

優雅

「その変態  
ストーリー女



トラがショックで  
泡出して  
気絶してんぞ！」

麻由

「キャアーーーー！」

トラ君！！

…今のうちに  
襲っちゃおか」

紗織・優雅

「ダメ！」

これは　トラ君じゃなくても　逃げると思っ…

優雅

「なんか話がとんでもなくそれたけど  
お姉様風で良いのか？何か着たいのある？」

紗織

「んー…」

麻由

「なんかある？」



最高に可愛いんだから」

うわ…

紗織

「どうしたの（汗）いきなりキザなセリフ吐いて…  
なんか大丈夫？」

優雅

「ガーン！

……鈍感だな

イヤそれは前からだったな…」

？

麻由

「キヤハハ！！

さーちゃん最高

優雅かわいそ（^^）

まあ

それはいいや

んじゃ

服は可愛い系で！

さーちゃん  
こっち来てえ  
」

紗織  
「う うん  
」

~~~~~

紗織  
「…これはちよつといやスゴく恥ずかしいよお／＼／＼／」

私は今  
ピンクのＴシャツワンピースを着ている

麻由  
「えー！  
すっごく似合ってるよお  
」

紗織  
「だって…裾短い…」

麻由

「スタイルいいし足が超　キレイなんだから！  
そこは出さないと！

はいこれ

ロングカーデ羽織って？」

紗織

「うっ…」

~~~~~

麻由

「優雅！

じゃじゃあーん！

さーちゃんです！

v (、・v) 「

紗織

「恥ずかしい…」

麻由

「ピンクのビビットカラーで

ロゴの効いているＴシャツワンピースに

シックなグレーのロングカーデをオンして

タイツを履かないず

素足で美脚を強調！

足元はゴツいスニーカーにレッグウォーマーをはいてボリュームを

!!!!

どうだ!!

麻由ちゃん特製コーデは!!!!!!

紗織

「ど どう? / / /

変かな?」

トラ

「変じゃないよ(^^) 似合っててスゴく可愛いよ!」  
(トラいつの間にか回復(笑))

麻由

「でしょ」

麻由とさーちゃん

どっちの方が可愛い?」

トラ

「…(苦笑)」

慧

「変態女より

そっちの方が

マシだろ

濃ゆくなくて」

（ずっといたが今まで一言も喋らずにいた慧くん（汗）てかどう  
イツどう扱えばいいか分からなかったアホな作者  
勘弁してやってください）

麻由

「あんたに聞いてないし！！

てかさっきまで

無言だったのに

いきなり話しかけてくんない！（怒）

…これ以上慧に言っても疲れるだけだ…

優雅はどう？」

優雅

「…」

紗織

「やっぱ

変だよね！？／／／

着替えてくる！／／／」

優雅

「ちがうんだ！！／／／

え…えっとっ／／／

なんかスゲー可愛くて！

∴ / / / / /

紗織

「 / / / !

あっありがとお…」

ひゃゝゝ

恥ずかしい！

正面で大きい声で

言われたら

誰でも恥ずかしいよね！？

顔熱いし…

きつと

真っ赤なんだろうなあ私（笑）

麻由

「二人とも

顔真っ赤あゝ

（ニヤニヤ）」

トラ

「スゲー顔赤いよ茹でたタコみたい」



二人とも？  
優雅君も？

チラッ  
あ ホントだ

優雅

「うっさいなあ／＼／＼  
ほらっ！

次トラの番だろ！！（怒）  
」

トラ

「怒らないでえ…タダでさえおっかないんだから  
んじゃ  
さっそくやろうか  
紗織」

「／／／はい」

まだ顔が

冷める間がないまま

次へ突入

私の変身は

まだまだ続く…

茹でタコ二人組〰〰（後書き）

次は

トラ&a m p・慧です！

ネイルは時間かからないんで…

トラの活躍は少ないかも（汗）  
すみません（泣）

お姫様だっこー！4

トラ

「ほい！出来た」

紗織

「わあ！

この黄色のチェック柄すごくかわいい！！斜めに半分だけって所

スゴいねー

どうやって作るの？」

トラ

「んー？

きぎょーヒミツ」

紗織

「えー 教えてくれたっていいと思うけど？」

トラ

「だって

誰にでも出来たら

オレ居る意味なくなるでしょ？

てか紗織結構

喋るんだね

学校じゃあ  
スゴく静かたけど」

紗織

「ホントは

喋りたいけど

私って見た目地味だから  
喋るイメージないじゃん

いっぱい話して

皆に引かれたら

どうすんの？

だから

なるべく

話さないように

してんの

てか

周りにいる人

大体アホ過ぎて

会話なんて出来るか

自信ないし！（^^）」

トラ

「そんな笑顔で…

結構グサツと来るよ

その言葉！

オレも

その一人すか…（泣）」

紗織

「トラ君は違うよ！ただ…」

トラ

「ただ？」

紗織

「いつも

女の子達に

追いかけてたから…

女の子達が…ね？」

トラ

「…（ゾーツ）

女の子って怖いよね…」

紗織

「同じ女でも

あれは怖いですわ…

あれは」

トラ

「だよな！！

よかったあゝ！

仲間が居た！

友達に相談しても

羨ましいとしか

言われた事なくてさあホントよかったあ」

紗織

「追いかけられないと分かんないのかもね（笑）

モテる男の

勲章ってやつ？

てかさ

女の子苦手なのに

何で私大丈夫なの？」

トラ

「さあ？

そういえばそうだ

なんでだ？

… あっ！

紗織は他みたいに

追いかけたり

襲ってきたりしないからかな！！」

紗織

「普通は

そんなことしないよ…

たぶん」

ガラッ

麻由

「トラくうーん！会いたかったあゝ」

トラ

「ウワアアー！！！！！！！！！！」

びゅーん！

風の如く

走り抜けて行つたよ…

会いたかつたて…

一時間も経つてないのに…

紗織

「異常だ…」

「ホント異常だな

アレは

キシヨ魔性女」

紗織

「び

びつくりした！

慧君か！



いきなりにも  
程があるよ!!」

慧

「人の勝手だろ  
なんでそんな事  
言われないといけないんだ  
てかもう終わったんだろ？  
次髪やるぞ  
早く終らせたい」

この…（怒）

年下なのに  
敬語も使わないで  
生意気きな  
でも  
言っても  
意味無さそうだしな…諦めよ

紗織

「はいはい」

慧

「…」

スタスタ

どこ行くんだ？

あっ

なんか振り向いた

慧

「着いて来ないと  
髪出来ないだろうが」

紗織

「は？

それならちゃんと言いなさいよ！  
口もってるんだから」

慧

「人と話すの嫌いなんだよ」

紗織

「何で？

楽しい事もあるじゃん」

慧

「俺と話

合わないんだ」

紗織

「どんなの？」

慧

「あんたに関係ない」

今ならわかる

麻由のキモチ！！（怒）腹立つう！

慧

「ココ」

目の前には

パーマかける機械とかいっぱいある

紗織

「わあ…」

ホントに家の中なの？」

慧

「優雅兄貴が

用意してくれた」

紗織

「やっぱり

金持ちなんだ」

慧

「まあ

そんな事はいいや  
ところで

長い髪だけど

髪の手入れに

どれだけ時間かける」

紗織

「時間？

そんなの5分で  
終わるよ

乾かすだけだし」

慧

「！！？

乾かすだけ！？

そんなに

こんだけ艶のあつて

纏まりのあるけど

サラサラになるのか？！」

紗織

「そんなに  
スゴい事なの？」

慧

「スゲーよ！

だって髪質が柔らかいから

手入れしないと

すぐにゴワゴワになるし

脂がないとパサパサでありすぎだとベトベトだぜ？

普通

そこまでにするなら

最低でも

一時間は掛かるぜ！

……… あっ

／／／／／

紗織

「なんだ

喋れるんじゃない……」

慧

「……笑うなら笑えよいつも喋らないやつがこんなに熱く語ったらおもしろいんだろ？」

あ 慧君も私と  
同じかも…  
周りが決め付けた  
自分の評価の枠に  
はまってしまったんだ

紗織

「そんな事ないよなんとなく  
わかるから  
そのキモチ  
！そうだ  
私の前では  
慧の本当の  
自分でいていいよ！」

慧

「は？何言って…」

紗織

「さつき髪の毛の事になったら  
すっごく目がきらきらしてたんだから！  
楽しいんでしょう？  
だったら  
楽しい方がいいでしょ？」

慧

「何分かったような口聞いてんの？  
てか慧って  
呼び捨て？」

紗織

「何でもいいでしょ！  
私の事も

紗織って呼んでいいからさ」

慧

「…アンタなんかの  
名前なんか言わないキモい（笑）」

紗織

「何をー！！」

慧

「はい  
アンタはさ  
パーマ当てても  
いい派？」

何か  
ムシされてるし…  
まあいいや  
疲れたし

紗織

「うん

実はかけてみたいと  
思っただよね」

慧

「んじゃ

揺る巻で」

~~~~~

紗織

「この髪型好き！」

慧



「だろ？」

俺の作ったのは

他より上手いんだぞ」

紗織

「何？自慢？」

慧

「自慢（^^）」

実はパーマ

当ててる間

音楽の話で大好きな

歌手でマイナーだから知らないだろうと

思ってた話したら

ファンだったらしく

意気投合したのだ

意外にいい奴で

面白かったりする

口が悪いのは

照れ隠しのため

（…だと思う）

慧

「優雅兄貴呼んでくる」

紗織

「ほーい」

楽しかったあ

また

話そ

「仲良くなっちゃって」

紗織

「へ

わっ！

優雅君いつの間に  
後ろに！！」

優雅

「楽しく話してるところから」

紗織

「声かけてくれたらいいのに  
あっ

さっき慧がね

優雅君を

呼びに行つたんだよ

てか

いたから

知ってるか…」

優雅

「慧？

つか何で呼び捨て？」

紗織

「仲良くなつたからだよ？」

優雅

「ふーん…」

なんか

機嫌悪いみたい…

話をなんか

作らないと…

紗織

「さっきね

慧とスゴく意気投合してたの！  
びっくりしたよお  
まさか…」

優雅

「慧の話はもういい  
後はメイクだけだからやるね？（^^）」

紗織

「う…うん  
わっ／＼／  
ちよつと何？！  
何でお姫様だっこ？！」

優雅

「ん  
気分」

紗織

「そんなあゝ  
おーろーしーてー」

優雅

「やだね」

私はお姫様だつこで  
連行されたまま  
次へ行くのでした…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8992e/>

---

恋愛メイク

2010年10月9日21時33分発行